

# 夢物語/かなたドツペル

ヒイラギP

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

突然だが聞いてほしい。僕は「阿良々木 暦」に憧れている。

ある日、寝つきが悪く最悪な就寝を迎えた僕が目覚めるとありえないことに「八九寺 真宵」に話しかけられた。なぜか彼女は僕を「阿良々木 暦」と勘違いしているようだった。

「八九寺 真宵」が自分と「阿良々木 暦」を間違えるなんてありえない。そう思った僕は「八九寺 真宵」から借りた手鏡を覗き込んだ。すると、

鏡に写っていたのはあれほど焦がれた「阿良々木 暦」の姿であった。

# 目次

かなたドツペル	かなたドツペル	かなたドツペル	かなたドツペル
始	参	中	序
34	22	11	1



# かなたドツペル 序

有り体に言えば、僕という個人を僕は心底、誰よりも、ずば抜けて、抜きん出て、凄まじく嫌いだった。

自己嫌悪、といえれば良いのやらわからないが主観視点でも客観視点でも中途半端な自分を許してやるような気は苦節三十年一切起きなかったのである。この「自分が嫌い」という一点においては他の誰よりも一貫していると自負しており、それを自己肯定の材料にしたがっている自分もまた嫌いだった。

そんな僕が自分とは全くの別人になりたがつてしまうのも仕方のない話だ。そう。他人になりたくて仕方がなかったのである。それより他に仕方がわからないとも言える。そしてどうせ「誰か」になるならば、「誰か」を選ばせて貰えるならば僕は「阿良々木 曆」を願った。平凡なままに中途半端な生を浪費している僕は彼の数奇な人生と精神の有り様、取り巻く環境全てに、一言で表すなら「阿良々木 曆」といふ物語」に憧れたのだ。

とはいえそのような非現実が現実起こりうるはずが無かった。残酷なことにこの世界に物語はあれど「物語」は無い。仮にあったとしても僕のような半端者の元にい

ば怪異はたどり着けないはずだ。残念さに一匙の安堵を混ぜたため息をつき寝具に身を委ねる。罪深くも生きのさばっている僕を咎めるようで、底なしの沼に引き摺り込むようで、僕の魂を連れて彼方までゆくようで——僕は眠ることが好きだ。どれほどかといえれば稼ぎのほぼ全てが寝台周りの設備投資に消えている。寝室とそれ以外ではエコーミーとファースト並の格差が生まれているほどだ。その不平等に斯く虐げられた部屋達の声は度々不便さとして僕へと届けられているように思える。

「嘘だ、眠れないなんて……」

渾身の寢床であるからして寝心地に問題は無い。それは確信を持って言える。それなら必然的に問題があるのは僕の精神だろう。叶うことのない憧れに想いを馳せたというだけでここまで乱れるなど情けない。情けない僕への最初の罰は、悶々と嫌悪の渦に揉まれながら最高の寝心地で最悪の睡眠だった。

「これはこれは木天蓼さん。今の時間は学校のはずでは？もしかしてサボりです？」

今まさに僕は明晰夢を見ているようだ。聞き齧った知識によれば明晰夢の中で起こる出来事に驚いて仕舞えば肉体はたちまち目覚めてしまうそうだ。それは余りにも勿体ないので平静を装う。たとえ夢だとしても「八九寺 真宵」との会話など一生に一度あるかないかだろう。このチャンスを逃せばきつと僕は2度と僕を許さない。絶対に

驚かないという全生命を賭けたミッシヨンの始まりだ。

「対猫用決戦兵器の名前で僕を呼ぶな。僕の名前は……」阿良々木だ。

「……? どうかしましたか阿良々木さん。あなたの名前は阿良々木暦ですよ? ついに自分の名前すら言えない知能レベルになってしまったのですか?」

当然と言った表情で「八九寺 真宵」が僕に語りかける。その当然に対して僕は当然違うと返すことができる。僕は「阿良々木 暦」に憧れはすれども「阿良々木 暦」では無い。彼と僕とは顔も、声も、身長も、何も似ていない。だが、僕より間近で「阿良々木 暦」を見てきたはずの「八九寺 真宵」が僕を「阿良々木 暦」であると言っている。考えられる夢の内容は一つ。

『八九寺 真宵』さん。手鏡か何か、何でもいいので姿を見られるものを持っていませんか?」

「本当にどうしちやっただんですか?——どうぞ、ちゃんと返してくださいね」  
「なっ、これは……!」

紛れも無く、見紛う事無く、僕の姿が阿良々木 暦になった。

「この目隠れは!」

目が覚めてあくびをするように、伸びをするように、日が差し込むように、僕は阿良々木 暦になっていた。

「このアホ毛はー！」

特にこれといった事もせず、僕の形が阿良々木 暦になったた。

「この暑そうな制服はア！」

僕は 阿良々木 暦 になって いた。

「なんで僕ごときが阿良々木 暦になれているんだ！こ、こんな事、おかしいだろ!!」

「いきなり大声をあげないでください！奇声が奇怪でキモチワルイです！」

物語シリーズの中でも2, 3を争うほど好きなキャラクターにされる罵倒は、純粹に傷つく以外にも何か刻まれるものがあつた。

無論1番好きなのは「阿良々木 暦」だ。

数分後

あれから僕は明晰夢のルールのことすら忘れて噴出する感情のまま喚き散らした。地面に寝転んでジタバタして、この大地を「阿良々木 暦」が踏みしめた可能性にうっとりしつつも口を動かすことはやめなかつた。「八九寺 真宵」はそんな僕を見て何を思ったのか一通りの情報整理（以上の奇行を指す）を終えた僕の頭を優しく撫でた。役得だ。

「つまりだ『八九寺 真宵』さん。僕は厳密には阿良々木 暦じゃあないんだ」

「何がつまりですか。アニメでもないんですから、説明もなしに意思を伝えるなんてで



きるわけないじゃないですか。何に突き動かされているのかは知りませんが、何故会うたびに更に変人さを増しているんですか？」

どうやら僕は「阿良々木 暦」が積み立ててきた記録を壊さずに済んだらしい。不名誉極まりない記録だったことが残念だが、憧れに一步近づいたと言えない事もないのではないか。いや、もはやこと奇行においては昨日の「阿良々木 暦」を超えたといっても過言ではない。阿良々木メーター的に言えば「々」ほどだろうか。

「ありがとう『八九寺 真宵』さん。話せば長くなるんだけど、聞いてくれる？」

「八九寺 真宵」によって憧れに近づくことが出来たことに気づけた上に話まで聞いてもらえるという事実が口元が弛む。たとえ夢の中だったとしても目覚めてから西尾神に500万ほどお布施した方がいいだろう。そうしなければきっと全国の「八九寺 真宵」ファンから袋叩きに合うか、2度と家に帰れない体にされてしまう。

「そこでなぜ感謝の言葉が出てくるのか皆目検討もつきませんがそれとこれとは別に話を聞いてあげましょう」

「本当かい？じゃあ……姿こそ阿良々木 暦そのものである僕の精神は、実は全くの別人なんだ。こうなった経緯も原因も一切が不明なんだけれど、とにかく眠りについた次のシーンにはすでにこの見た目になってたんだ。僕としてはこの状況が夢であると思っっているんだけど、明晰夢にしては思っているよりもタフだったから通常と比べて何

かが違うのは確かなんだけどそこに關しては情報が無いって感じ」

「……にわかには信じ難いですね。1番可能性が高いのは阿良々木さんの悪戯なんです。それはこれまでの全てを無に帰す推理なので一度なかつたことにします。とすると、阿良々木さんの言う明晰夢ですが、これを良しとすると私は阿良々木さんの創造物ということになりますよね？それは絶対に嫌なのでこれは夢では無いということにして下さい。お願いします」

「そんなに嫌なものかな？『阿良々木暦』の創造物だよ？ああ……確かに、『阿良々木暦』の創造物ならまだしも僕というのは嫌だよ。わかるよ、『八九寺 真宵』さん。僕も僕自身の夢とは言え僕の体を僕が作っているというのを自覚したら急に腹が立つてきた。どうだろうか？2人で僕に対して反乱を起こさないか？」

「そうだ。よく考えたら僕が今「阿良々木 暦」の姿をしているということは、僕という汚泥以下の塵芥以下の何者にも形容することが失礼に当たる存在が「阿良々木 暦」の姿をしていることに他ならない。いち早く体を返さなければならぬ。そのためにもすぐさま目覚めたい。だが、「八九寺 真宵」と会話をするチャンスのみすみす放棄するということのもまた愚かな行為であり、全国の「八九寺 真宵」ファンに殴り殺される。「そんなことは一言も言つてませんし反乱も起こしません！私はただ私の存在が誰かによつて創り上げられた偽物なのかもしれないという可能性が嫌だと思つただけです」

「そ、そうか。ごめん『八九寺 真宵』さん。自己嫌悪に『八九寺 真宵』を巻き込んでしまうなんて……お詫びと言ってはなんだけど、『八九寺 真宵』さんも何か僕に聞いてほしいことや手伝って欲しいことはあるかい？」

僕としたことが、自己嫌悪のあまり「八九寺 真宵」に對してとんだ無礼を働いてしまった。僕が聞いてあげられるお願いは精々寝具周りのことくらいだが、「八九寺 真宵」のお願いとあれば身の丈の10倍までの無茶なら受け入れよう。でなければ僕としても不安だし、十中八九全国の「八九寺 真宵」ファンに公開リンチにされるし、クエストボードに磔にされる。

「お詫びとか別にいらないます。それよりさつきから気になっていたんですけど、あなたが阿良々木さんによく似た誰かだったとしてなぜ私の名前を知っているんですか？」

「仕掛けは案外単純なもので、簡潔に言えば知っているからだよ」

「知って、いる？」

「うん。知らないことが多い僕だけど、自分が嫌いつて事と君たちの『物語』については多少、『知っているんだ』『八九寺 真宵』さん。なんなら『見ていた』『聞いていた』『読んでいた』と言い換えることもできる」

僕がキョーンシーなら。つまり「斧乃木 余接」ならばきつと「僕はキメ顔でそういった」なんて言うだろう。

原典のような可愛らしさは無く、汚泥のような内面が滲み出るようで全く忌々しい。そう、忌々しいキメ顔だった。

思ったより場の空気が重くなってしまった。僕の生まれ持った社会不適合者オーラでさえ「阿良々木 暦」の妖艶なフェイスを通して放出されると、ラスボスもかくやというほど圧となってしまおうようだ。

それと先ほどの発言について、信じてもらえないかもしれないが「羽川 翼」の名台詞をなぞるような言い方になってしまったのは自然に内から出た言葉だと誓わせていただきたい。

しかし、発言の最中に突き動かされるような衝動があった。もしかすればこの世界において「知っている」と発言すること自体が特別な意味を持つキーワードで言葉の格に合った言い方を強制するのだろうか……突飛な状況に混乱しているのだろうか。どう考えても飛躍した理論ですら真実であるかのように思えてしまう。

「とはいえ、見ず知らず？ 見覚えはあるのか。見て知らずの男性にフルネームを看破されていると言う体験は紛れもなく恐怖体験だね。配慮が足りなかった申し訳ない」

「い、いえ。つまりは『そういう』事ですよ？ あなたは」

『『そういう』ことって一体……あー、なるほどそうか。僕は君達からすれば確かに……そうか!!』

怪異そのものじゃないか。

「阿良々木 暦」の姿をして、全くの別人であり、これまで一切その姿を見せなかったのにも関わらずこの町で起きたある程度の「物語」を把握している。客観視すれば見事に怪異だ。怪奇現象だ。言うなれば「阿良々木 暦」のドッペルゲンガーだろうか。まあ、僕にはオリジナルにとつて代わろうだなんて大それた野心はないが、「姿」と言う一つの因子をピックアップすれば僕は「ドッペルゲンガーの怪異」だ。ならば、この幸運な夢を全うするならば、「怪異」として暗躍するのが礼儀といったものだろう。

「ククク、バレてしまつては仕方ないね『八九寺 真宵』」

「いや、今まさに気がついたみたいなりアクションしてたじゃないですか。無理にキャラ作らなくてもいいですからね」

「せっかくの怪異デビューなんだ。このひとときの夢をもつとはしゃがせてくれたつていいじゃないか」

「怪異つてそんなに気安いものじゃないと思いますが……夢がどうか寝言はよして早く行きましょう」

「行くつて言つてもどこに行くんだ？『八九寺 真宵』さんの怪異特性的にたどり着くというの……」

「それは昔の話です。今はもう縛られていないので」

「そうなのか！それは良かった。そうか時系列的にはもうそこまで進んでいるんだね」  
「そんな言い方をしても伝わりませんよ。貴方からはどこまで過去でどこからが未来なのかが見えたのかもしれませんが、私にとってここが現在ですから、はつきり言つて不快です」

「申し訳ない。どうにも現実味がなくて、というのは言い訳に過ぎないか。今後このよ  
うな物言いは避けるよう気をつけるよ」

「悪気がないのはわかりますので……気をつけてくれればそれで手打ちとしましょう。  
それで目的地ですが、簡単な話です。阿良々木さんの姿をした怪異が現れたのなら、阿  
良々木さん自身に何かしらの原因があるはずですよ」

「ま、待つて『八九寺 真宵』さん。それって」

「察しがいいように助かります。会いに行きましょう！阿良々木さんに！貴方がなつて  
しまったという阿良々木 暦に」

## かなたドツペル 中

アニメで幾度となく描写されてきた「阿良々木 暦」の家。多少リアルになっているものの、今日に飛び込んできたのは間違いないそれだった。初夏の日差しは学生服の僕には暑く感じる。僕をここまで連れてきた少女はそうではないのか、「八九寺 真宵」はそういつた存在ではないのか、汗ひとつかいていない。もしやこの汗は日差しに溶かされた僕の灰なのではないか。「阿良々木 暦」をこの目に映せることによほどハイになっているのか足の感覚が長い間正座をしていたかのように鈍い。

「ねえ八九寺さん。本当に『阿良々木 暦』に会おうって言うのか？ 僕が『阿良々木 暦』にどんな影響を及ぼすかわからないって言うのに」

そうなのだ。『阿良々木 暦』の姿をした怪異』となつた状態の僕を「阿良々木 暦」に合わせることの危険性を「八九寺 真宵」は理解しているのだろうか。例えば「ドツペルゲンガー」や「スワンプマン」などの偽物を使った怪談話は複製体がオリジナルを害する性質を持っていることがしばしばである。僕にその意図がなかうと「阿良々木 暦」を害してしまう可能性は少なくない。

「それに、いきなり家に自分そっくりの人間がいたら、その、『阿良々木 暦』が驚きす

ぎてしまうんじゃないか？ そうした結果「忍野 忍」に僕の排除を命じるかも知れない。いや、命令するまでもなく『主人様の姿を真似るなど無礼じゃ』なんて言つて即切り捨てられるか。もしかしたら、ご都合主義的に、願望を映し出すように、2次創作のように、それこそ夢のように『主人様にここまで似ているとは……ばないの！』なんて言つて見逃すかも知れないが、その後のこと……よくよく考えたら「戦場ヶ原 ひたぎ」の突破口がないじゃないか!!」

「無駄に忍さんのものまねが上手い……あと、阿良々木さんを含めたみなさんがあなたを殺そうとすることは無いと思いますよ。あなたに敵意がなければの話ですけど」

「阿良々木 暦」は僕の憧れにして、目標の存在なのだから敵意など抱くはずがない。自分に置き換えて考えてみればいくら自分そっくりだろうと敵意を持たない人間を殺害する気にはならない。「八九寺 真宵」が言うように考え過ぎだったのだろう。ただし、「阿良々木 暦」のためであれば誰でも殺せてしまうため「戦場ヶ原 ひたぎ」の存在は考慮しないものとする。さらに言えば「戦場ヶ原 ひたぎ」は「阿良々木 暦」を騙る僕の存在を許さないだろう。知った顔で彼らの「物語」を語る僕を許さない。誰が許しても僕が許さない。卑怯にも自分を許さない僕を「戦場ヶ原 ひたぎ」は許さないだろう。

ふと、妙案を思いついた。



「八九寺さん。確実に迷惑をかけることが確定していることだし、何か……そう！ドーナツを買ってくる。僕の不在の間に『阿良々木 曆』が来てしまったら来るべき自分自身（見た目だけ）との対面への心構えを作らせておいてくれないか？」

初対面時のインパクトを「八九寺 真宵」をクツションにすることで和らげ、「忍野 忍」に対しておおよそ正解である差し入れを送り第一印象をよくする。確かに先程の発言は考えすぎかも知れないが、大事なものは考える姿勢を見せること。考えすぎてから回っているぐらいがちょうどいい……「阿良々木 曆」の善性を最大限利用した僕の安全を確保するための僕らしい全く必要のない化かしだ。

「あつ！ 阿良々木さん……によく似た人!!」

「八九寺 真宵」の動揺した声を尻目に僕は走り出す。目にも止まらぬと言えるほど走りには自信はないが、呼び止める隙のないほどとは言える程度の速さだった。もはや誰も僕を止めることはできない。この完璧な計画のたった一つの欠点といえば僕がこの街のミスの位置を知らないということだけだった。

八九寺 side

「ごめんなさいね！ 八九寺さん!!」

開いた目に低い姿勢はどこか弱々しく見える。不気味で不確かどこから見ても阿良々木曆であるのに致命的に阿良々木曆でないというのがその人の印象だった。

「知ったような口を聞く」という言葉があるが、あの人はまさに何かを知っているような喋り方をした。あの人は私たちの物語と言っていたが、あくまで阿良々木さんを取り巻く現象は内々の話であり、知る由もないことのはずだ。突然現れた不審者でどう考えても危険人物、のはずなのにこちらに対してあまりにも好意的すぎるあの態度がそれを忘れさせる。

それはそれとして

「あの人、多分逃げましたね」

推測に過ぎないが、阿良々木さんに会う時が近づいたことで緊張が限界を超えてしまったのだろう。僅かな時間の会話であったがあの人阿良々木さんへの好意は大きく、そして今まで見てきたものとは違く見えた。純粋な重いと言うよりは崇拜に近い、おおよそ人が人を持つべきではない感情。一体あの方は阿良々木さんの何を知っているのだろうか。

「はーちーくーじー!!」

「ぎゃあああ!!」

私としたことが物思いに耽っていたせいで背後からの接近に気づけなかった。悲鳴の収まる間も無く背後から持ち上げられ体を弄られる。こんなことをするのは阿良々木さんくらいのものだろうか。全くどうして崇拜対象にしようなんて考えることができ

るのかわからない。

「久しぶりだなあ！ 1週間ぶりか？ もつと触らせろ撫でさせろ!! 僕の手に八九寺の感触を思い出させろ！」

「いやああああ!!!」

「はっ」

抵抗しようと振り上げた手が顎を掠めて、阿良々木さんは気絶した。

「ところでいきなりどうしたんだよ。ここ、僕の家の前じゃないか」

「ああ、それに関してお伝えしたいことがあって」

突然現れた阿良々木さんにそっくりなあの人について話さなくてはならない。一度描写したことをもう一度書くと言うのも面倒なので説明は省略させていただく。

「お前の言うその僕のそっくりさんの姿がないじゃないか。姿だけでいえば僕そのものと言えるほどそっくりなら一眼見て真偽を確かめたいところなんだが……」

「あの人は今ミスドにドーナツを買いに行ってます」

「そいつ僕の姿のまま何やってんの!?!」

「おそらく忍さんを警戒してるんじゃないかと思われます。自分が阿良々木暦の姿になったことで阿良々木暦さんの周囲の人間に消されると思っただけです」

「ちよつと待つてくれ、いくら僕に似ているとはいえそいつが忍のことを知つてると言うのはおかしくないか？」

「ああそれについての説明がまだでしたね。あの人……：そういえば私名前を聞いていませんでした。一体どの誰なんでしょうか……：それは後で聞くとして、あの人が言うには『君たちの物語を知っている』とか言つてましたけど、意味深な雰囲気を押されて質問できなくて……：明確な意味までは理解できないままなんですよね」

「物語、か。言葉通りに解釈すれば……：荒唐無稽な話だけ僕や八九寺の過去や現在、もしかしたら未来に至るまでを知つているといふのはどうだ？」

「ありえない。と言いたいが言い切れない部分が多々ある。彼の「時系列的には」という発言だったり、こつちの事情を知つていにしては怪異に対しての考え方が甘かつたりするところだったり、知つていながら領ける。全て知つていながら私を迷い牛だと思つていた。全て知つていながら怪異に恐怖しない。それなのに全て知つていながら一体何をしようとしていのかはわからない。考へてみると一方的に知られていと言ふのは快いものではなかつた。

「そうだとしたら、流石にちよつといやですな」

「否定しないのか？」

「ええ。できないと言つたほうが私の感情を的確に表しているかもしれませぬ。彼の言

動にはいくつか知っていないと出来ないことが含まれていますから」

「……そうだな。忍のドーナツ好きは僕らの中ではまあまあアリティの低い情報ではあるけれど他人が知り得ることもでもないし、八九寺が言うにはそいつ、戦場ヶ原のことも知ってたんだろ？ 現在進行形で怪異と密接に関わっている僕らならともかく戦場ヶ原のことまで知っていると……何者なんだ？」

「私から話せることはもう無いことですし、本人から聞くとしましょうか」

そう言い放ち電柱柱の影に視線をやると、姿は見えないもののザッ！ つと身を捻るような音がする。一瞬はラスボスにも見えていた謎の存在の視線を感じると思っただけをかけたら本当にかかってしまった。威厳というかプレツシャーの落差で風邪をひいてしまいそうだ。

「なんだ八九寺？ って、もしかしてそこにいるのか!? すごいベタな展開だな!」

「ほら、もうバレてるんだから出てきてくださいよ」  
あなた side

あかん。あかんわもう。どないしよか。わからんもう。「阿良々木 暦」本人おるやん帰って来たらもう。手え震えてもうとるし、めっちゃ話し込んでるし僕行かれんて、あの中入っていくとか「物語シリーズ」的にもアウトやねん。はあー。「阿良々木 暦」側の心の準備がいくら整ったって僕が出来てなかったら意味ないっちゅーのに気付い

とらんかったわ。やってもらたわ。ほんま堪忍してーや。

「——本人から聞くとしましうか」

咄嗟に身を引く。どうやらエセ関西弁で精神の安定を取ろうとしているような暇はなかつたらしく、完全に僕の隠密がバレている。「八九寺 真宵」やはり悔れない存在だ。悔つたことは一度たりとて無いけれども。

「なんだ八九寺？ って、もしかしてそこにいるのか!? すごいベタな展開だな!」

あ、「阿良々木 曆」がこつち向いてる! これは夢か? 夢です。夢でなければ許せない! とはいえここまで言われて出ていけないもの探偵に正体を突き止められた犯人が黙秘権を行使するようなもの。興奮めで、ルール違反だ。よってすぐさま姿を現すべきなんだが……いざ「阿良々木 曆」の前に出るとなると緊張する。何言つてこのドーナツを渡せば良いのだろうか。というか財布が都合よく元々の僕の財布だったから良かったものの持つてなかつたらどうするつもりだったんだという問話は捨ておいてさつさと足を動かさなければ。

「……出てこないな」

「いるはずなんです、おかしいですね」

もうだめだ。変な空気になってる。これがラストチャンスだ。これは「試練」だ。緊張に打ち勝てという「試練」と受け取った。

——静まった夕暮れの空に一人分の靴音と、遠く響くいくつものエンジン音が混ざっていく。

「やあ。「阿良々木 暦」。君たちの仲睦まじい会話に入っていくのも気が引けたのでね。電柱の影で待たせてもらったよ。「八九寺 真宵」もありがとう。「阿良々木 暦」に僕のことを話しておいてくれたんだね……」

「電柱からディアポロみたいなことしてる僕が出てきた!？」

「脱いで無いからほんとに謎の所作ですね」

「わあ! 生の『阿良々木 暦』のツツコミだあ!!」

「無邪気か! 一回始めたなら最後までやれよ!」

どうやら声に出ているらしい。さすがの僕も「阿良々木 暦」に指摘されれば最後までやり通さなければなるまい。

「コホン。人の成長は……」

「本当に始めちゃったよ!!」

「——そうだろう? 『阿良々木 暦』」

「ああ、この人やっぱりバカなんですな。安心したというか落胆したというか」

重いものが一度坂を降り始めると止めるのが難しいように、足取りが重かった分僕の口もまた簡単には止まらないようで、一瞬の無言も許さないレベルの捲し立てようだつ

た。少しかかり気味かもしれない。どこかで息を入れられたらいいのだが。

「というわけで最後までやり切ってみたがどうだろうか『阿良々木 暦』。いやすまない、いきなりディアボロやられても困るよな？ たまたま知ってたから突っ込めたものの知らなかったらマジものの冬が来たよな。緊張していたとはいえ許されないうことをしたと思っっている。結論を言ううと腹を切って詫びようと思うんだ。どうかね」

「どうかねじゃねーよ！ ハラキリなんて詫びられた気にならないし、そもそも僕の姿で自傷行為をしようとするな!!」

「それもそうだな。重ねてすまない。それと——」

ずつと手に持っていたミストの箱を手渡そうとすると、箱が「阿良々木 暦」の手に渡る瞬間、どこかから手がサツと伸びてドーナツを奪い去ってしまった。

「あ。すまん。うちのが行儀悪くて」

これ、「忍野 忍」の仕業で間違いないのだろうか。1日の間に「八九寺 真宵」「阿良々木 暦」「忍野 忍」とコンタクトを取るとか、僕はこれから死んでしまうのだろうか。具体的には各国から集まった「物語シリーズ」ファンにありとあらゆる暴力を与えられたのちに死んでしまうのだろうか。自然と悪い気はしない。笑顔で逝ける気がする。

「構わないさ。むしろポケスナでレアモーションを見たが如き幸せが駆け巡っている



「よお！ アハ」

「うわ、阿良々木さんに匹敵するとんでもない顔してますよ」

「さすがの僕もこれに匹敵すると言われるのは嫌だ。あと、何気に吸血鬼をポ○モン扱  
いするな！」

ツッコミも罵倒もドーナツまつしぐらも、こんな幸せが僕に訪れてはいけな  
いだろう。夢であろうとも許される事ではない。嬉しいのが許せない。顔が綻び  
そうになるのが許せない。数多この状況を望む人がいる中で、最も価値のない僕  
が、最も価値のある体験を掠め取ってしまった。許せない。許せない。ゆる

「アハ！ アハハハ！！ ア……………」

「え？」

!!!!!!!

「し、死んでる！」

「ま、待て八九寺！ 気絶してるだけだ!!とにかく一旦いての中に運ぶぞ！」

「はい！」

……………

## かなたドツベル 参

意識が朦朧として頭が働かない。気だるさが全身から力を削ぎ落としていく。波に飲まれる砂のように暗闇と自分の境界線が混ざり合つて溶け出していく。ひんやりとした風が肌を撫でるたびに自分を形作る物が消失していく。

これこそ僕の望んでいた罰なのかもしれない。大嫌いな僕はこれで死んでしまつて、愚かにも「阿良々木 暦」の姿を偽つた僕は裁かれてしまつて、それで僕の「物語」は終わりを迎えるのだ。未練がないと言えば嘘になるが、未練を残して消えてしまう方が僕らしいとも言える。何も成し遂げられず、しようともしないで……ずっと、ずっと。こうして自分を否定して、罰し続けた先に僕は何を望んでいるのだろうか。

あのまま消えてしまふのが定めだと思つていたが、不思議なことに目が覚めた。あれも夢だつたということだろうか。聞き齧つた話によると多重夢（夢の中で見る夢）には夢占いの意味があるらしく、世間一般的に悪夢であろうあの夢には「疲労や緊張感の現れ」という意味があるらしい。

確かに今日という1日はにわかには受け入れ難い現象に溢れていた。それを加味す

ればそのような夢を見ることも頷ける。問題があるとすればこうして夢から目覚めたはずの僕がいまだに夢の中にいるということである。一応これが夢で無いとする推論もあることにはあるが、それは流石に……無いと言い切れないのが恐ろしいことだ。あまりにも幸運すぎるし幸せすぎる。僕にそんなことが許されて良いはずがない。

とはいえ目覚めるタイミングというか目覚める条件というのが一切わからない。夢なのだとなれば唐突に目覚めることもあるだろうけれど、こうにもはつきりとした世界だと終わり方も何か形があるに違いないと思うのだ。そうなるとこの世界での身の振り方を一度真剣に考えた方がいいのかもしれない。

「目が覚めたみたいだな」

「どうやら気を失っていたみたいだね」

「ああ。お前を部屋まで運ぶの大変だったんだぞ。僕の体って結構重いんだな」

「すまない……謝罪の意を込めてここで！　って今は「阿良々木 曆」の姿だったな。まだ少し頭がぼうつとしていて……」

「一体何をやる気だったんだ？　それはともかく、さつき気絶したばかりなんだから体調がすぐれないのも当然だ。無理はしないでくれよ」

「いや、寝ほけみたいなものだから気にしないでいいよ」

「そうか。それならいいんだけど」

そういつて「阿良々木 曆」は僕に冷えた麦茶を差し出した。氷がコップとぶつかるたびに風鈴のような綺麗な音を鳴らす。よくよく考えると今日に入って一度も水分をとっていなかったの、一口一口が極上の味だった。

「ところで――」

「阿良々木 曆」の纏う雰囲気ガラリと変わる。僕がよく知っている表情で僕を睨む。怪異と対峙する時の顔だ。一瞬の戸惑いのあと自嘲的に笑う。そうだった、今の僕は「阿良々木 曆」の姿をしているんだ。彼からすれば僕は不気味で仕方ないのだから。当たり前前のことを忘れてしまっていたようだ。

「お前、何者だ？」

「何者、と言われても君ほどの人間ではないよ。これといつて語り聞かせる武勇伝もなければ長所なんてとんでもないことだ。ただただ、ある日「阿良々木 曆」の姿になつてしまっただけの一般人さ」

「僕たちのことを知っていると云っていたな」

「そうだね。でも正確には違うかな」

「――？」

「これは僕の中にだけある境界線なのかもしれないけど……僕は君たちのことを知っている訳じゃない。君たちの『物語』を知っているんだ」

「阿良々木 曆」ははまだ要領を得ないようだが、同じようで全く違うのだ。僕は「物語」の住人が何を思い、何をしたかを限られた範囲で見てきた。だがそれは彼らを理解した訳では無い。だから決して僕は「阿良々木 曆」を、「忍野 忍」を、「八九寺 真宵」を、「戦場ヶ原 ひたぎ」を、「羽川 翼」を……「物語シリーズの住人」を知っている訳では無い。絶対にそんなこと言つてはいけない。

「違いがあるのか？」

「違うさ。全然」

「……『なんでも知ってる』んじや無いのか？」

「あはははは！ 『阿良々木 曆』らしい鎌掛けというか……僕がオマージュするには言葉が重すぎるけど、まあいい。そう言われたらこう答えざるを得ない。『なんでもは知らない、知っていることだけ』つてね」

「なんでそんなに似てるんだ!? いや、まあいい、お前に聞きたいことがある」  
僕の手を結露が伝う。

「八九寺から話は聞いた。突然僕の姿になってしまつて困っているらしいじゃないか」

「そうだけど……？」

「それなのにお前は僕たちの事を『知っている』。その前に1つ聞いて置かなきゃいけないかったな」

「だから、僕が知ってるのは『物語』なんだってば！」

「お前は怪異を『知っている』のか？」

「怪異を知っている」か否かという問いは実質「お前は怪異か」という問いに他ならない。怪異というのは基本的に人間の尺度では推し量ることのできない超常の存在なのだから。それを知っているということはその存在もまた超常の者であるという事になる。今の僕は怪異の様なものだけれど、生まれつきの怪異である訳ではない。どちらかと言えば僕は怪異というよりも怪異の被害者なのだ。

それに、自分が怪異であると認めるのは嫌だった。こんな事を言えば「阿良々木 暦」は僕を怒るだろうが、僕にとって怪異とは「物語」を面白くする存在であり、僕なんかになっていいものではないからだ。故に僕はもし今の僕が100%怪異だったとしても怪異ではないと言い続けるつもりだ。

「……僕は怪異を『知らないよ』知った気になってるだけだ。僕は『阿良々木 暦』が出会わない怪異は知らないし、出会った、もしくはこれから出会う怪異についても知ったかぶりの知識を振りかざしているだけだ」

「僕が出会う怪異？」

「そう。僕が見ていたのは『阿良々木 暦』を中心として回る『物語』なんだ。だから『阿良々木 暦』の出会う怪異の事しか知ったかぶれないんだよね」

「本当にここにお前が来てしまった事に心当たりはないのか？」

心当たり……ざつとこの世界に足を踏み入れる前の事を思い出してみても特にこれといったことには辿り着かなかった。

「すまない。強いて言えばあの日の夜は寝付きが良くなかったということぐらいだな。正直あれはショックだったな。これでも僕は眠りの質については一言あって、寝室にほとんどの稼ぎを注ぎ込んでる程なんだ。体を包むベッドは完璧に体を支え、高さも最も僕の身長にあっているからアクセスしやすい。さらに空気清浄機とこれの正式な名前はわからないけど湿度調節機が常に稼働している。アロマキャンドルも炊いているし風呂の後のストレッツチも欠かしていない!!僕の睡眠環境は最高なんだよ!!それでも眠れないなんて……そう考えたとあの日の夜は異常だった。ちよつと僕が精神的に不安定だったというのも影響してると思うけど、この件との繋がりは薄いと思うな」

阿良々木 暦は考える。これらの発言を信じていいのか。そしてこの不審人物を信じていいのかを考える。

「阿良々木 暦」が沈黙する。僕を観察するようにじいつと視線を飛ばしてくる。何か僕の発言に粗相があったのだろうか……もしや睡眠への思いを語り過ぎたのだろうか!?!確かに「阿良々木 暦」が聞いていたのは僕がここに来てしまったこと、「阿良々木 暦」の姿になってしまったことの原因の心当たりであって、ここにくる前夜の異常に

ついてでは無かった。的外れなことを言った僕を怪しんでいるのだろうか。

「あれこれ聞いて悪かったな。どう見ても怪しかったからつい」

「いや、正直自分でも怪しいと思ってるから気にしなくてもいいよ」

それが何故かはわからないが、「阿良々木 暦」の中で何か解決しようだった。

「そういえばお前……あー、僕、お前の名前知らないんだよな。八九寺も知らないみたいで結構なあだ名つけてたし」

そう言えば「八九寺 真宵」と会った時から一度も名乗っていないので「阿良々木さん」「阿良々木さん……にそっくりな人」「阿良々木擬さん」「偽アララギさん」「あららBさん」「あいつ」「お前」などと呼ばれていた。僕からすれば全く間違いではないのでそのまま良かったのだが、これらの呼び方は気に入らなかったようだ。

「今更感がするけど自己紹介をば。僕の名前は宙野かなた。今年30歳の現役サラリーマンだ」

「え？ リーマンなの!？」

「うん。特にこれといって特技のない、寝ることと自虐くらいしか語ることはない中年一歩手前さ」

「僕の姿でなんて夢のないことを!!」

「おお！ また『阿良々木暦』に突っ込まれてしまった!!」



「あいも変わらず自由な奴だな……」

どちらかといえば自由というか浮遊である。「物語」シリーズの世界に入り込んでいくこと、さらに言えば憧れの「阿良々木 暦」と会話していることに浮かれてしまっているのだ。一応いい年の大人ではあるが、心境としてはヒーローショーのヒーローを間近で見た子供の心境に近い。

「ところでかなた、お前家帰れるのか?」

「ああ、ここからの正確な道はわからないが地図を貸してもらえるか、検索させてもらえば電車を使って帰らせてもらおうよ」

「そういうことじゃなくて、僕の姿のまま帰って大丈夫なのか?」

「あ」

「考えてなかったのかよ!?」

仰天の連続でそこまで頭が回っていないかった。「阿良々木 暦」はそういうつもりで言ったわけではないのだろうが、現実に「阿良々木 暦」の姿をした人間が現れたら、大混乱を招くことは間違いない……待て、何かがおかしい。

『阿良々木 暦』!!今すぐにでも地図を調べたいのだけれどいいかな!!」

もしここが現実なら何かの拍子に「阿良々木 暦」を目撃する人がいるはずだ。これまで一度もそれが無いとなると……僕の予想が正しいなら事態は思ったより深刻だ。

「おわーいきなりなんだ？僕のケータイで良ければ貸すけど」

そう言つて、「阿良々木 暦」はベッドに放り出されている自身のガラケーガラケー：ガラパゴス携帯の略称。2007年に発売されたIphoneに自然淘汰された悲しき携帯電話。知らない世代も出てきてるのかなあ……いや、ほんとに悲しくなってきたわを差し出す。そうかこの時代はまだガラケーが主流だったか。なんだか懐かしい気持ちになりながらそれを受け取る。

「ありがとう」

「阿良々木 暦」があらかじめ地図の検索画面を開いて渡してくれたので入力は無ムーズに行うことができた。細かい気遣いに感謝を述べつつも検索の結果を待つ。

「……無い」

まさかと言うべきか、やはりと言うべきか、検索結果に僕の住所は無かった。そもそもの話、僕の世界とは世界線も時間軸も違うのだから僕の家がある方がおかしいだが、流石に焦らずにはいられない。

「何が無いんだ？」

「僕の住んでる場所が無いんだ。地名も住所も何もかも違っている!!」

「なんだって!!？」

「ああ、マイスイート寝具……」

家をなくし、意気消沈する僕を見ていられなくなったのか「阿良々木 曆」がそつと部屋を立ち去る。ひとり残された僕はそつと泣いた。

それから少し時間も経って考えがまとまったので、それを伝えるために「阿良々木 曆」を待つ間、僕は暇を持て余していた。

一度落ち着ける時間を手にしたのであたりを見回してみると、見れば見るほどアニメの描写通りの風景がそこにはあった。ここが本当に「物語シリーズ」の世界なのだと感じる。

ところで、いつしか「神原 駿河」が発見せしめた「阿良々木 曆」のマニアックお宝本とは如何なるものなのだろうか。

「ちよつと探してみるか？ いやいや！ 流石にルール違反だ！ 僕はそんな事しないぞ!!」

「何をしないんだ？」

「あ、これは違」

「何をしていたのか定かではないけど、後ろめたい事があるのは想像に難くない。せつかく人がお前を泊めてやれないか妹たちに聞きに行つてやつたつてのに邪な考えを巡らせていたなんてな」

意地の悪い目線が僕を突き刺す。こんなに良くしてくれようとした人に一瞬でもあんな……自己嫌悪の感情が止まらない。

「うう、ごめんよ『阿良々木 暦』い」

とうか今僕の聞き間違いじや無かったら泊めてやれないか聞きに行つてるとか言つてなかつたか？

「はは、そんなマジになるなよ冗談だから。それで聞いてきた結果だけど、泊まつていいつてさ。良かったな」

「泊まるつて僕が、『阿良々木 暦』の家には？」

「その通りだ。それ以外に何があるんだよ」

「えー!!え?えー!!!」

「そんなに驚くことか？」

「そうだよ。なんだつて『阿良々木 暦』の家だよ?」

「ああ。たかが僕の家に泊まるぐらいでそんなに大騒ぎされても困る」

「僕以外にもたくさんいると思うぞ。『阿良々木 暦』宅お泊まりイベントで大喜びする輩」

「そんなわけあるか!」

「阿良々木 暦」の家に泊まるなんて僕なんかに許されていいのだろうか。いや、よく

ない。これから一体どうすればいいんだ。

## かなたドツベル 始

「そんな、僕なんか『阿良々木 暦』の家にいる事すら許されざる事なのに泊まるだなんて」

「一体誰が許さないっていうんだ？」

「……僕、かな？」

流星にあまねく「物語」読者が……とは言えなかった。

「阿良々木 暦」の申し出は僕の境遇を考えれば的確かつ妥当な判断だと言えるが、その対象が僕自身であることに問題がある。

想像してみたい。君の推しの家知らないぽつと出のキャラが押し入って挙げ句の果てに泊まるなどと言う展開を。おおよそ隣に立つべきではない、無個性極まりない凡夫が何も知らずに笑っている光景を。

腑が煮え繰り返るようではないか。

よりにもよってその位置にいるのが僕である。外見と声は良くとも、思想も、個性も、生き様も腐っている。外見と声は「阿良々木 暦」の物になっているから手放して素晴らしいと褒められるが、元々の姿に戻れば全ステータス最低値の男が1人ポツンという

だけだ。こんな奴は、そうだ。深夜に山奥にでも行って迷惑をかけないように息を引き取ればいい。

名案が浮かんだところで、先ほどから何か考えてる様子だった「阿良々木 暦」が口を開いた。

「ずっと疑問に思っていた事があるんだけど」

「僕」ごときに答えられる事ならなんでも答えるよ」

「阿良々木 暦」が僕に何らかの疑問を持つのは当然のことだ。先ほどの問答は謂わば存在の確認というべきで、僕個人の安全性を測り切れるとは言い難い。当時の僕は、あの「言い回しができる流れに興奮して意味深な言い回しを楽しんでしまった。つまり「阿良々木 暦」からすれば僕は未だに、正体不明のそっくりさんなのである。

とはいえ「阿良々木 暦」はいつたい僕に何を尋ねるのだろう。なんでもと宣言したが僕自身を語れというのは拷問のようなものだ。僕がどのような人間か、それを知るための質問と言えば好きな食べ物、好きな女性のタイプ、最近読んだ小説……そんなところだろうか。

「何故そうまでして、頑なに自分を卑下するんだ？」

僕は呆気にと取られ、目を丸くした。そこまで踏み込んだ質問をされるとは思っていなかったからだ。確かに僕の自己嫌悪は人並みはずれていると自負しているし、それを隠

すどころか全面に押し出してはいるけれど、自己嫌悪に足るほどの不甲斐なさや至らなさも同時に知らしめているはずだ——こうして自死もできずに「阿良々木 暦」の姿でいることもそうだ。

流石の僕でも生まれた瞬間から自己嫌悪に身を焼かれていた訳ではなく、自分を嫌いなものにも僕なりの理由がある。それは「阿良々木 暦」にとつての「高校二年生から高校三年生の狭間である春休み」の如く、あるいは「老倉 育」の件の如く、一生連れ添うべき罪で、忘れがたい過去で、まだ若かった僕の思い上がりが招いた、悲劇的で、ある意味では当然の末路だった。

「自分が嫌いなんだ。僕が僕自身を卑下する理由はこれに尽きるよ。期待に沿った返答ができていればいいけど……もしも僕の過去について知りたくて聞いたのなら、予めよくある話だから時間の無駄だと忠告するよ」

苦しい言い訳だった。結局僕は中途半端だ。なんでも話すと言いながら罪の告白を避けたのだ。

「無理には聞かないさ。だから、勝手に推し量る事にするよ」

「推し量るまでもない。僕は既に『阿良々木 暦』、君にとつて不明瞭で不気味な存在のはずだ。即排除に動かないのが不思議なほどに」

「そうかな？ お前は僕に対して……それだけじゃ無く、八九寺や忍に対してだって誠実



だった。お前は確かに不明瞭だし、不気味だし、たまに気持ち悪いけど、そんなのは珍しい話じゃない。知っているだろうが、僕の周りには常識の範疇外にいる奇人変人の類がゴロゴロいるんだぜ」

確かに僕程度の自己嫌悪では「物語」世界の住人の強烈な個に肩を並べる事はできないだろう。一時であろうと時間を共有した僕を「阿良々木 暦」が切り捨てられない事も理解している。僕は我儘を言つて「阿良々木 暦」を困らせているのだろう。それでも譲れない事があつた。

「それは確かにそうだね。異論はない。あつたとしても感情論だろう。だけど一個だけ認識を改めてもらう必要がある……僕は誠実なんかじゃない。僕を誠実だというならこの世の全ての人間は誠実だというようなものだ。この人の形をした畜生ほど誠実という言葉が似合わない者もない。なんたつて僕は何一つとして為せずここまできただから」

「生きてるだけで素晴らしいなんていうつもりは無いが、何も為せず生きてきた人間なんてそう居ないぜ。日々の小さな成功に目が向いてないだけなんじゃないか？」

「確かにそうかもしれない。『阿良々木 暦』の言っていることは芯を喰っている」

「やけに素直になつたな」

「申し訳ないけど、「それでも」と言わせてもらうよ。僕は何も為せなかつた。日常の中

でほんのひとひらの成功を収めたつて僕にとつてなんの意味もない。成功でも失敗ですらない」

「……意外と頑固だな」

ああ僕は「阿良々木 暦」に対して、いやそれを抜きにしてもほぼ初対面の相手に何を話しているんだろうか。さすが主人公ということか喋りやすいことこの上なくて、要らないことをペラペラペラペラと「阿良々木 暦」には鬱陶しい思いをさせてしまっただろう。僕としてもここは譲れない部分だから、平行線になつてしまつてゐる。

「やめよう『阿良々木 暦』。僕なんかのことを話していると気が滅入るよ」

結局、はぐらかす事にした。誰が言えるだろうか、私は人殺しです。などと

「僕としてはこれからどれだけ生活と共にするかもわからないお前の、人となりが垣間見えてよかつたよ——というわけだ」

「阿良々木 暦」の視線が僕の瞳を貫く。澄んでいて濁つていて真つ直ぐで歪んでゐる。「阿良々木 暦」の声が鼓膜を揺らす。僕の罪をそつと撫でるように触れ、再認識させる。「阿良々木 暦」が手を差し伸べる。汚泥の如く腐つた僕に一筋の光が刺したようだった。

「よろしく、かなた。働かざる者食うべからずだ。うちでの家事、覚えてもらうぜ」

「……」

ここまでされて、すぐに手を取ることができない。差し伸ばされた手を掴む資格があるのか。僕の存在を本当に許容しているのか。状況がそれを許さず彼の善性が僕を受け入れることを嫌々許諾するように強制したのではないか。そうでなければ僕のようなものを受け入れるはずがない。

いや、もはや逃げ場はないのだろう。自責によつて他者を遠ざけるのは己の未熟だろう。他者と関わらなければ少なからず迷惑をかけることはない。だから、誰とも関わり合いたくない。そんな子供じみた論理を展開していられる状況では無くなった。僕自身に起こつた異常を解決しない事には「阿良々木 暦」に迷惑をかけ続ける事になる。

この手を、取るべきだ。

「よろしく……頼む。『阿良々木 暦』」

「そういえばまだ挨拶がまだだったな」

これは「阿良々木 火憐」「阿良々木 月火」あるいはご両親のことだろう。居候するとなれば両方という可能性もあるか。だが「阿良々木 暦」と全く同じ姿をした他人の存在というのは「怪異慣れ」している「阿良々木 暦」ですら胆を抜かれていたようだし、怪異とあまり馴染みがない彼女らを驚かせてしまうのではないだろうか。手を取ると決めたのは僕だが、その決断が誰かを怯えさせるのは本意ではない。もし受け入れら

れないようならすぐに対策を改めなくてはならないだろう。

「僕と会わせて大丈夫なのかい？」

「世界には同じ顔をした人間が3人はいる。そう説明したら納得してくれた」

自信ありげな「阿良々木 暦」とは対照的に僕の額には冷や汗が滲む。そんな雑な風説でどうして納得させられるというんだ。

「そんなバカな、髪型や制服まで同じなのに」

「街中で似た服を着た人間をたまに見かけることがある。その例を出したら納得してくれ」

これを良かったの一言で済ませていいのか。こんな状態で本当に受け入れてもらえるのだろうか。そんな不安が顔に出ていたのか「阿良々木 暦」は一転まじめな表情になった。

「これまで色々な厄介ごとを抱えてきた僕だから、何となく今回もそうなんだろうと察してくれ。つてところもあるだろう」

「ああ、それでようやく納得がいった……というか揶揄うのはよしてくれよ」

「阿良々木 暦」は悪いなという一言と共にこちらを一瞥すると部屋を出て行った。着いてこい、と言外に表しているのだろう。待たせるわけにはいかないと、すぐさま立ち上がったそそくさと後を追った。——それにしても「阿良々木 暦」にあのように擲

揄われるとは思わなかった。あれは「阿良々木 曆」なりの歩み寄りなのだろうか。それとも僕の反応を見ていたのだろうか。いやそんな打算的な人間ではないはずだ。きつとただの戯れに過ぎない。となれば、僕は「阿良々木 曆」と戯れたという事になる。どれだけ努力しようとも願おうともこのような状況でもなければ一生叶わない幸運。全く光栄なことだ。

先ほどから疑ってばかりの自分に嫌気が刺す。自分への不信は僕を信じると決めた者への不信に変わってしまう。それを疑ってしまえば何も立ち行かないとわかっていないのに、自己嫌悪をすることでしか僕自身を保ってられないから、この悪癖を止められない。視線を上げれば「阿良々木 曆」が僕の前を歩いている。いつの間にか俯いて、目の前のことに集中出来ていなかったことに気がつく。そうだ、まずは眼前の問題に着手するべきだ。「阿良々木 曆」「八九寺真宵」とのファーストコンタクトはテンションの暴走で上手くいかなかったと記憶している。今回こそ自らを律して、「阿良々木 曆」のご家族とのコミュニケーションを成功させようではないか。それを成し遂げてこそ「阿良々木 曆」から賜った誠実の言葉に応えられるというものだ。例え誠実の二文字が受け入れ難かったとしても託された言葉に背けるほど腐っている訳じゃない。「幾つになっても初対面というのは緊張するね。それがこちらが一方的に知っているなら尚更だ」

「言葉だけを見れば同意できるんだが、対象が僕の家族つてので恐ろしさが勝る。……  
というか、誰を待たせているかは教えていないはずなんだが」

「もちろん知っているさ。でも安心してほしい。以前僕は混乱と興奮で正常な判断が出来なくなっていたけれど、今の僕は冷静だ。それをあえて伝えるようなこともしないし不安を煽るような言動は命に変えても避けるよ。まあこの軽い命が変えになるかはわからないけどね。今日はご両親は」

「阿良々木 暦」がでつちあげたバックストーリーに一応は納得しているのだからハードルは下がっているはずだ。それなりにあり得そうな身の上話をすれば疑われはすれどもいたずらに驚かすこともないだろう。

「今回は妹たちだけだ。手間をかけるけど日を改めてもらうことになる。……僕が言うのもなんだけどお前、軽々しく命をかけすぎじゃないか？ 軽口には聞こえないから心臓に悪いぜ」

「それと一つ忠告しておくが、僕の妹だけあつて二人は妙に鋭いところがある。下手な嘘はかえって危険だぜ」

さすがはファイヤースターズ、侮れない。僕に限つてこの世界の住民を侮るということはないのだけれど、用心に越したことはない。

「それなら僕をどう紹介するつもりなのかだけ教えて欲しいな。最低限の口裏合わせは

必要だ。まさかさっきの冗談をそのまま言うわけでもなだらうし、と言つても僕のことをそのまま伝えるわけにもいかないでしょ」

「阿良々木 曆」が口を開こうとしたその時、曲がり角から人影が迫ってきた。

「まずい!」

「人のこと待たせておいて随分楽しそうだね兄ちゃん遅いから呼びに来たよ……つと、嘘、本当にそっくりさんっているんだ!世界に3人同じ顔の人間がいるって本当だったんだ!」

こ、この快活にして明瞭な可愛らしい声は「阿良々木 曆」の妹にしてファイヤーシスターズの一人。人の身に余る武を宿し、あの有名な兄弟喧嘩のシーンでは道場以外で禁止されている技を容赦無く「阿良々木 曆」相手に叩き込んだとされる、今から作戦会議を挟んだのちに万全を喫して相対する筈だった……

「——『阿良々木 火憐』か!？」

動揺して早速ボロが出た。とにかくなんとか誤魔化さなければ

「えー、と……『阿良々木 曆』さんからお話は伺っております。詳しい話はもうお一方も交えて」

「兄ちゃんの見た目で敬語使われるとめっちゃくちや違和感」

しまった。「阿良々木 火憐」に嫌悪感を与えないように言葉を選んだつもりが自ら

の姿を考慮しなかったことで擬態してくるタイプのモンスターののような違和感を与えてしまったようだ。

「故意では無いにしろお兄さんの姿になって混乱を招いてしまい、申し訳ありません。もし、ほんの少しでも嫌だと感じたら言っていただければ、すぐさま痕跡ごと姿を消すことを約束します」

「普通に生きていて聞くことはないだろう謝罪だな」

こう進言することでしか己の無害を表す術はない。決意した手前ここで「阿良々木暦」の手を離す結末になることは避けたいが、自分のエゴを通して誰かに迷惑をかけるなど、過去の失敗から何も学ぶことができなかったというようなものだ。

「いきなり兄ちゃんになっちゃって混乱してるのはえつと、名前は？」

「宙野かなたです」

「阿良々木 火憐」は僕の後悔や不安を感じたのか僕の方に向き直ると、ヒーローの風格を思わせる笑みを浮かべ、宣言した。

「今一番困ってるはかなたさんだ。一時的に家を貸すくらい的事で文句垂れるなんてそんななかつこわるいことは出来ないぜ」

「……流石は『阿良々木 暦』の妹。いや、流石は『ファイヤーシスターズの阿良々木火憐』だと言い直させて欲しい。僕の卑屈で君の誇りを傷つけてしまうところだった



ね。もし既に手遅れだったなら僕をその傷と同じだけ傷つけてくれて構わない……と  
いうのは少し卑怯だったかな」

「兄ちゃん。この人変だ」

「珍しく見解が一致したな」

僕の謝罪になんてことはなさげに毒を吐くと「阿良々木暦」は「阿良々木火憐」が通つてきた廊下の曲がり角に視線をやつてこう切り出した。

「ところでだ、そろそろ月火も待ちくたびれてるだろうし、早くこの変人を紹介してやろうぜ」

変人という呼称が僕に対するものであることを文脈で理解してから、内心で納得するまで少しばかりのラグが発生したけれど、一連のやり取りで見せた僕の振る舞いは、動揺していたものの変人と云つて相違ないか。

これから対面するだろう「阿良々木月火」はその移ろい易さと自由さから「物語」に関する知識があらうと一筋縄ではいかないだろう。「阿良々木暦」が警戒を促したただけのことはある強敵だ。

いや敵という表現は妥当ではない。強敵改め強壁、音にしてきようへき。だが、断じて胸壁とは書かない。なぜならば「阿良々木月火」の胸は掴めるほどにはある。「阿良々木暦」がそう出来たことがそれを証明している。

……ハッ！急に何を考えているのだ僕は。これではまるで「阿良々木暦」のような思考ではないか！——それは失礼に当たるのではないかと思わないくもないが。

僕が「阿良々木暦」になったのは肉体だけだと思っていたが、まさか思考までもが近づいているのだろうか。だとすれば……

「最高の気分だ」

これが成されればおそらく僕という個は消滅する。完全な「阿良々木暦」に変化して現実に帰るのもよし、「物語」の異物として専門家に処理されるのもいいだろう。そして最も有力なのは「くらやみ」だ。物語における、絶対的な裁定者。「くらやみ」の存在定義を鑑みれば、僕のような存在こそを消し去るべきなのだ。

仮説が正しいかわからないが、どの道消え去ることが出来るのならば、永遠の眠りに向かえるのならこれ以上のことはない。

僕が消えるかどうかはその時が来ればわかる。意識を切り替え「阿良々木月火」の待つ部屋へと歩みを進めた。

「兄ちゃんやっぱりこの人変だ！」